

# 人類史・神話から振り返る未来 ～コロナ禍が人類に与えるメッセージ～

○川井 徳子 (ノブレスグループ)

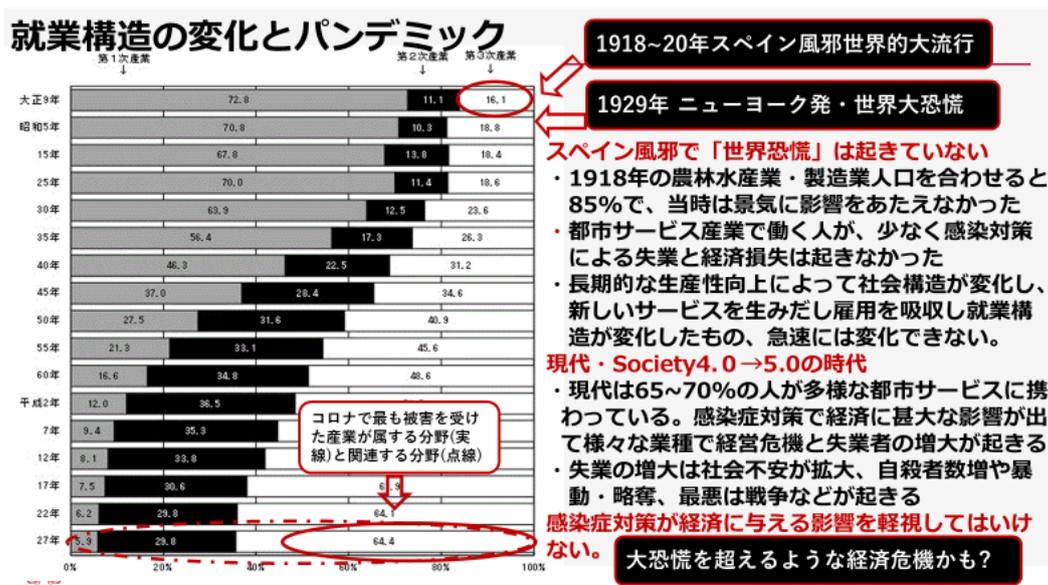
キーワード コロナ グローバル・パンデミック・クライシス 都市型サービス産業

## 【1】研究の背景と研究目的

コロナによるパンデミックは中国から始まり短期間に世界中を巻き込んだ。感染拡大防止のために各地で空港閉鎖やロックダウンなどが起き、Global Pandemic Crisis(以下GPC)と呼ぶべき状況となっている。飲食、観光、レジャー等都市型サービス産業を中心に需要が消失した。イベント産業もその渦中に巻き込まれ東京オリンピックやドバイ万博も延期されることとなった。世界経済は大幅に縮小しており、規模は第二次世界大戦の引き金となった百年前の「大恐慌」に匹敵するとの予測もある。本論考は2025年の万博開催国として「万博においてコロナ危機の深層と解決策を国際社会に提示する」ことの重要性を確認し、その解決策を模索することを目的とする。

## 【2】研究のアプローチ その1 コロナは経済のどこに影響を与えているか

コロナはスペイン風邪と比較されることが多いが、スペイン風邪流行時には今回のような経済収縮は起きていない。その理由を産業構造の変化から探してみる。



・GPCの経済への影響は感染症対策の結果であり全産業に及んでいるわけではなく、農林水産業や製造業、食品小売業といったところには大きな影響は出ていない。百年前にはまだ

萌芽にすぎなかった外食やレジャーといった都市型サービス産業に大きな被害が出ている。当時と現在の違いである産業と就業構造の変化がもたらしたものと推定できよう。百年かかった変化であるため、短期ショックによる膨大な失業者を即座に吸収するのは不可能である。サービス産業社会である先進国を中心に高失業率が続き、社会が不安定化している。

## その2 危機に際して人類はどう対処してきたか

ジャレッド・ダイヤモンド(UCLA 地理学教授)は著作「危機と人類」において、個人の危機を分析し、結果を左右する要因を12に分類した。それを展開して国家的危機に直面した複数の国を分析している。その中で重視されているのは「危機の自覚」と「アイデンティティ」である。まずは、危機にあるという自覚を持つことが重要である。

個人的危機の帰結にかかわる要因	国家的危機の帰結にかかわる要因
1 危機に陥っていると認めること	1 自国が危機にあるという世論の合意
2 行動を起こすのは自分であるという責任の受容	2 行動を起こすことへの国家としての責任の受容
3 困いをつくり、解決が必要な個人的問題を明確にすること	3 困いをつくり、解決が必要な国家的問題を明確にすること
4 他の人々やグループからの、物心両面での支援	4 他の国々からの物質的支援と経済的支援
5 他の人々を問題解決の手本にすること	5 他の国々を問題解決の手本にすること
6 自我の強さ	6 ナショナル・アイデンティティ
7 公正な自己評価	7 公正な自国評価
8 過去の危機体験	8 国家的危機を経験した歴史
9 忍耐力	9 国家的失敗への対処
10 性格の柔軟性	10 状況に応じた国としての柔軟性
11 個人の基本的価値観	11 国家の基本的価値観
12 個人的な制約がないこと	12 地政学的制約がないこと

米国の大恐慌では経済収縮が5年続きGDPは73%まで縮んだ。世界各国はグローバルにものごとを考えることなく、ナショナル・アイデンティティの強化が進み、自国経済の防衛に走ったのである。その結果もたらされたのが第二次世界大戦であった。

GPCのもと米国のGDPは4~6月で前年比65%にまで落ちている。多少の戻りがあっても、今もリーマンショックより悪い状況にある。大恐慌時と比べて株価は維持されているが、現実の失業率の高止まりと需要ショックは続いたままだ。先進主要国はみな同じ状況にある。我々は大恐慌の再発を防ぎ、戦争という最大の危機を乗り越えられるのだろうか。その時も、ダイヤモンドが示した国家の12の要因に関する分析は貴重な指針と考える。

### 【3】 結語 グローバル・アイデンティティと世界神話学

1929年の大恐慌から1939年の第二次世界大戦の勃発まで10年あるとしたら、2025年万博は1933年シカゴ万博と似た位置づけとなる。GPCの渦中でこれまでの延長でものごとを進めれば、シカゴ万博と同じ結果となるだろう。2025年万博は、歴史を踏まえて現在の危機を国際社会に示し、解決策のための話し合いの場を提供する数少ないチャンスである。そのために、我々がその危機を正確に真摯に受け止めなくてはならない。世界的危機を放置し、国家間のアイデンティティにとらわれ、戦争の災禍に巻き込めることが起きないようにするためには「グローバル・アイデンティティ」の育成が急務と思われる。現在、出アフリカを起点とした人類のDNAの歴史と世界地図に落とし込まれた比較神話学を重ね合わせた研究が進んでいる。「人類を一つの壮大な物語にまとめ上げる【世界神話学】こそ、我々の救世主となるかもしれない」ということを提示して本稿を締めくくるものとする。